

「指を使わずに解くから、引き算が“楽しいやつ”になる」

新・個別指導アシスト習志野校 檜山亮人

入塾したばかりの小学3年生の男の子が塾に来て、机に置かれた引き算プリントを見てひと言、「楽しいやつだ」。そのときの彼の目は、まるで新しいおもちゃを見つけたようにキラキラと輝いていました。そのプリントは、ひたすら引き算の練習を重ねるもの。ところが彼はつい最近まで、引き算を見ると「いやだなあ」と手が止まりがちでした。

どうして嫌いだった引き算が“楽しい”ものに変わったのでしょうか。理由はシンプルです。指を折って数えるやり方から、“指なし”的計算方法に切り替えたからです。なお、指を使うこと自体は初期段階の数量概念の形成に有効で、移行のタイミングは学年や習熟に応じて段階的に行うのが望ましい点を付け加えておきます。

「時間がかかる。」「指を折りながらでも計算ミスする。」

そんな段階から一歩踏み出し、新しいメソッドを覚えた彼は、目に見えてスピードが上がり、正確さも向上しました。「できた」という実感と「もっとやりたい」という意欲が生まれ、引き算を「楽しいやつ」へと押し上げたのです。

子どもが勉強中に手を止めていると、つい大人は「集中力が足りない」「怠けている」と短絡的に見てしまいがちです。けれど、時間のかかる解き方しか身につけていない子に、大量演習を課すのは酷です。苦手意識があるものは、ほんの少しでも大仕事。数問解いただけで「もう疲れた」となっても、それは当然の反応と言えるでしょう。

保護者は、子どもが幼いころは「健康に育ってほしい」「優しい子に育ってくれたらそれで良い」と純粋に将来を思い描きます。しかし成長とともに理想はすこしづつ高くなり、欲も出て「これくらいできて当たり前」という気持ちが顔を出します。大人にとっては些細なことでも、子どもたちの日常は新しい挑戦の連続であることを忘れてはいけません。塾は、そんな子どもたちの小さな努力を見守り、最適なステップアップを促す場所です。

大切なのは、解き方を理解すること、より効率の良い解き方を身につけること、短時間で正確に問題を解く力を育てる事。脳に新しいテクニックがインプットされれば、同じ集中力でこなせる問題量はぐんと増え、「解けた！」という成功体験が意欲を呼び起こします。

指を折りながら計算する子の保護者に対して、しばらくすると自然と指を使わなくなるから大丈夫とアドバイスをする人もいます。その考え方自体は必ずしも誤りではありません。ただ、塾は限られた試験時間の中でより高い点数を取る訓練をするための場所でもあります。

「どうしたら子ども達が楽しく取り組めるか」を徹底的に追求し、指導法を磨いていくことが肝要です。「楽しく」と言っても、ゲーム性を持たせた斬新な指導法を取り入れる必要もなければ、正解した時の褒美が必要なわけでもありません。できるようになると自身が楽しさに変わります。苦手を乗り越えてステップアップする感覚をぜひ味わってほしい。自信をみなぎらせた表情に生まれ変わる瞬間に立ち会いたい。塾の先生は、日々そんな瞬間に立ち会えるチャンスがある、実に贅沢でやりがいのある仕事ではないでしょうか。